

近世初期加賀藩藩主前田家の病と治療・医家

池 田 仁 子

はじめに

これまで筆者は金沢の暮らしや文化についてまとめ、『金沢と加賀藩町場の生活文化』を、さらに、城内での藩主前田家の医療や医者をめぐる問題について整理し、『近世金沢の医療と医家』なども上梓し、また、藩の医療・救恤政策、医学教育などについて考察した。特に近年、近世の医療について、政治史的視野から考証することの重要性についても論じた⁽¹⁾。

しかし、これら近世の医療について、不充分であることはいうまでもない。すなわち、侍帳や城下町絵図における医者の検索においては、近世初期からみてきたが、前田家の医療総体について、初期の城主で加賀藩の藩祖利家から4代光高までの医療については、まだ、着手に至っておらず、また、城下の医者や遊学などに関しても不充分であった。なお、藩祖利家は天正9年（1581）織田信長より能登を拝領、同11年豊臣秀吉から金沢城と北加賀2郡（石川・河北）を増封され、同13年以降は豊臣政権下、主に上方に住み、或いは戦争に赴いていた。

本稿では、こうした点を踏まえ、利家から利長・利常・光高の代における前田家の医療、病気・治療に関して、いつ・どこで・どの人物が、どのような病気に罹り、病状がどうだったか、藩内や徳川家等からの対応はどうか、どの医家の治療を受けたかなど基礎的な問題について考察していきたい。

また、利長・利常に関しては、管見の範囲ではあるが、未刊の史料は翻刻し、年次比定可能なものは検討を加え、さらに、治療に当たった医家のうち重要人物とみられる盛方院らに関してどのような史料に記載されているかなど紹介、利長らの治療との関わりについて検証していく。こうしたことは、医療都市金沢の一側面を見る上で、その前提となるものとして重要である。

一、利家の代の病気と治療

藩祖利家の時代は、まだ戦国の世であり、生命を維持し生存していくといった気風が希薄であったものとみられ、医者を召抱えて医療に取り組ませるという医療制度なども未整備の状態であったものと推測される。

さて、前田家初期4代の病や治療について、部分的に『加賀藩史料』（以下『藩史料』と略記）1～3巻などにも収録されているが⁽²⁾、この場合本稿では出来る限り原本にて確認し、また、『藩史料』以外に、管見に触れた未刊史料及び既刊史料をも取り上げることに努めた。さらに、特記しない史料については、本文及び表全体において、金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵の史料を活用した。これらは何れも近世初期の治療と医家に関し主な事例を掲げたものであり、これらがすべてでないことはいうまでもない。因みに利家等病気に関するものは、伝聞も少なくなく、記述内容に誇張のある場合も否めない。が、当時書かれた史料も少なく、およそ前田家の病気・治療を見る上では、これらを除外してみると極めて困難である。しかし、例えば利家に関する多くの伝記の中でも「利家公御代之覚書」など、可能な限り古いもの、その後の記録類のもとになったとみられる史料を選択・活用することに努めた⁽³⁾。

まず、利家及びその子利政の病気・治療について〔表1〕からみて行こう。

[表1] 前田利家・利政の病気の事例

年月 〔西暦〕	居所	人名 (年齢)	主な内容 (症状・病名、治療医、諸方対応等)	主な典拠史料
天正18年〔1590〕 7月10日	京都 聚楽	利政 (13歳)	関東の陣から利家は、小田原北条氏康の降伏を報じ、又若(利家の子利政)の眼病を見舞い、油断なく養生するよう、なお又若の患の事心許ない事等、書状を送る	「松雲公採集遺編類纂」 139巻(「三輪文書」)
文禄4年〔1595〕	京都	同上 (18歳)	孫四郎(利政)は疱瘡に罹り、著名な医者衆を呼寄せ、薬は夕庵が処方、やがて快気、その間太閤・関白らは日々御見舞う	「亞相公御夜話」中巻、 「高徳公御夜話」下巻
慶長3年〔1598〕 4月～5月	上野草津温泉 →金沢	利家 (61歳)	湯治に行き(京都よりカ)、以白(伊白、出羽最上出身)の鍼治療受け、初め効き目あり、30日程過薄墨のような小水出て、草津の湯に入り、金沢(城)へ上ってからも、薄墨色止まらず	「利家公御代之覚書」 「利家記」5巻、「陳善録」「高徳公遺誠鈔」上巻
慶長4年〔1599〕 2月11日	大坂	同上 (62歳)	利家は病中にて村井豊後(長頼)ら重臣を召寄せ、篠原出羽(一孝)・神谷信濃(守孝)取立てにつき話す	「国祖遺言」
同年 2月29日	大坂→伏見	同上	利家は疾病中、家康に謁するため、大坂より伏見に来る	「天寛日記」52冊本7巻
同年 2月	大坂	同上	路次(庭)を遊覧、咽より白き細き虫出、村井勘十郎(長明)が引出す。虫の御持病有り	「利家公御代之覚書」 「利家記」5巻
同年 3月8日	同上	同上	徳川家康は利家へ返礼に御越、御煩弥重りと申し御対面、御重病難治の躰にて対面する	「陳善録」「関屋政春古兵談」
同年 3月13日	同上	同上	徳川家康は利家の宿所に宛て御煩の見舞状を送る	「加越能古文書写」 (「羽咋郡菅原村行長文書」)
同年 3月15日	同上	同上	利家は咽より虫2筋出、御遺物等につき芳春院(利家正室)に書かせる	「国祖遺言」
同年 3月19日	同上	同上	家康は利家の宿所に宛て、御煩の見舞状を送る	「寸錦雜編」
同年 3月21日	同上	同上	利家は病が進み、芳春院に遺書を記させる	「高徳公遺誠鈔」下巻
同年 閏3月3日	同上	同上	利家は逝去する、享年62歳(一説に63歳)、前日2日乗物にて大坂城内山里丸の路次へ出る。(ある時利家は鶴を食し虫に当る、また、秀吉が聚楽に在城時、手料理を振舞われ、虫持病故、御小姓2人連れ門内に入ると述る)	「利家公御代之覚書」 「利家記」5巻、「陳善録」「三壺聞書」6巻上(「国祖遺言」)

「天寛日記」は国立公文書館内閣文庫蔵(同文庫の「天寛日記」には46冊本、52冊本、58冊本〈外題は「寛永日記」〉の3種があり)、「三壺聞書」は金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵、17冊本を活用した。なお、上記表の「寸錦雜編」は、原本を確認することができず、刊本『藩史料』に依った。

[表1] よりみていくと、利政の病気に関しては、天正18年(1590)「又わか(又若、利政)め(眼)いよいよよく候や、ゆたん(油断)なくようしやう(養生)御させ候へく候」(「松雲公採集遺編類纂」139巻〈「三輪文書」〉)と見え、利家は利政の眼病の見舞いと同時に、小田原城主北条氏直が降したことを領内に報じている。また、利政は文禄4年(1595)18歳で疱瘡に罹り、著名な医者衆が呼び寄せられ、夕庵という医者が薬を処方している⁽⁴⁾。

次に利家については、[表1]より慶長3年4月から亡くなる翌年閏3月までの事例に関し、次のようにまとめることができよう。1点目に、上野草津温泉への湯治と伊白による治療である。慶長3年（1598）（京都よりカ）、利家は草津へ「御湯治之時、今春七郎、はりたて以白（伊白、出羽最上）御供」し（「利家公御代之覚書」）、以白の鍼治療受け、初め効き目あり、30日程過薄墨のような小水が出て、草津の湯に入ったが、金沢へ上ってからも薄墨色が止まらなかったという。2点目に、喉より白き虫が出るという「虫持病」（蛔虫症）であった。このような時は、村井勘十郎（長明）が虫を引き出し、また、同年喉より虫2筋が出たことにより、利家は先行きを安じ、御遺書を芳春院に書留させた。3点目に、徳川家康より複数回にわたる「御煩」に対する見舞いがあった。例えば慶長4年3月13日利家に宛て、「弥無御油断御養生専一候」（「加越能古文書写（羽咋郡菅原村行長文書）」）と見える⁽⁵⁾。一方、利家も病中ながら、家康に謁するため、大坂より伏見に赴いている。このように、前田家は礼状とともに逐一病状の報告を行なっており、この背景には、前田・徳川両家の間がきわめて緊張関係にあつたことが窺われる。4点目に、養生として大坂屋敷に造らせた室内を遊覧したり、逝去の2日前乗物で大坂城の山里丸の庭に出て遊覧し、保養したという⁽⁶⁾。

二、江戸における芳春院の病と医療

慶長5年（1600）上方から人質として江戸に赴き、同19年金沢に帰るまで、有馬温泉への湯治などもあるが、足掛け15年の間、江戸で暮らす芳春院の病と治療について、[表2]に示した。なお、江戸における近世初期の上屋敷は、慶長10年利常が家康から拝領したという辰口邸が知られるが、上方から下ったばかりの芳春院は江戸のどこで暮らし始めたのか定かでない。今後この点も検証していく必要があろう⁽⁷⁾。

[表2] 江戸における芳春院の病と医療

年月 〔西暦〕	年齢 (歳)	主な内容 (症状・病名、治療、医、諸方対応等)	典拠史料
(慶長5~13の間) 〔1600~08〕	54~62	病は一進一退を繰返し辛いが、25日より少し和らぎ、この日は胸の痛みは無し。しかし、喉ばかりが痛い。このまま快方に向うと思うが、これまで、このように長期間痛むことはなかった	「芳春院消息」千世宛、土佐、家政313
慶長9〔1604〕 18日	58	喉の調子も余りよくなく、困っている。が、食欲があるゆえ、良いほうである	「芳春院消息」千世宛、射水33
(慶長10~19の間) 〔1605~1614〕 10月6日	59~68	9月より喉が腫れて胸も痛み、玄鑑の調合した薬を飲んでいる	「芳春院消息」千世宛、土佐、家政311
(慶長10~19の間) 〔1605~1614〕 16日	59~68	薬を飲み、灸治療も行ない、元気になったゆえ、このまま死ぬことはない。利長が江戸へ来ることを心待ちにしており、また、「京」（利政）は自分（芳春院）の病については何も知らないでしょう。いまだ手が震える	「芳春院消息」千世宛、射水32、「村井文書」2巻
慶長11年〔1606〕 6月6・7・8・ 10日	60	蛔虫症に細菌性下痢が加り、曲直瀬玄朔が診療（6・7日霍乱吐瀉して心下虫痛む〈寄生虫による腹痛、心痛〉、足冷え脈沈遲す、安胃湯、勝紅円ノ之剤、陳青稜我良各1勺莎2勺、右入姜1煎、8日痛み止み吐亦止む、大便常に瀉す、今弥瀉し口乾く、理中湯、霍香正氣を与う、5芩合、10日渴止み瀉同前、育脾散、回ノ参芩白朮湯散、参朮令山宿霍貴姜蓮証蔻炮甘各分）	「医学天正記」（寛永4年版、京都大学富士川文庫本〈『葉史学雑誌』38巻1号〉）

(慶長11年6月) 〔1606〕	同	3日に「かいき」（咳氣）が再発し、6日に「大むしくい」（蛔虫）がひどく暴れ、2、3日苦しみ、さらに腹中が様々痛み、難儀した（激しい嘔吐と下痢）。『道三』（曲直瀬玄朔）に付きっ切りで治療してもらひ本復した。一生にこのようなことは二度とない程苦しんだ。22日より起きているが、身体はまだ衰弱している	「芳春院消息」千世宛、射水35
(慶長13年カ) 〔1608カ〕 17日	(62カ)	朔日より恐ろしき病に冒され、薬師衆の診断は、氣の疲れに血が錯乱して出血し、その後気が強いゆえ、本復したとのことであった。3日の昼より晩まで耳盥を8度替え夜4時分まで流れる如く出血、「大うす会」（デウス所、キリスト教会）に奇特性あるとのこと、橋爪縫殿（宗俊）が取りに行き、その薬でうがいをしたら、湧き出でていた血が止まった。そのうち薬も飲まず、脈が途切れ、身が石の如くになり、水ばかりが身体から流れるように出て行き、夜が明け、脈が少しづつ戻った	「芳春院消息」村井長次宛、射水13
(慶長15年10月カ) 〔1610〕29日	(64カ)	湯治で一段と息災になり、灸も数多すえている	「芳春院消息」村井長次宛、射水17
(慶長17~19の間) 〔1612~14〕9月	66~68	咳氣がひどく、散々である	「芳春院消息」「ほうがうは」（芳春院の孫直之の乳母）宛、土佐、家政315

慶長11年の芳春院の曲直瀬玄朔による診療日記にみる診療については、吉澤千恵子・御影雅幸・多留淳文「『医学天正記』に見られる芳春院殿（前田利家公正室まつ）診療記録に関する考察」（『薬史学雑誌』38巻1号、平成15年）による。これ以外は、『前田土佐守家資料館所蔵・射水市新湊博物館所蔵 芳春院まつの書状図録』前田土佐守家資料館、平成24年による。典拠史料欄の土佐は前田土佐守家資料館蔵、射水は射水市新湊博物館蔵を表わし、数字などはそれぞれ館蔵の文書史料番号を示す。

芳春院の病・治療について、[表2] より慶長5年～19年頃までの様子につき整理すると、喉痛・咳氣、胸痛、蛔虫症、これにともなう腹痛・心痛、嘔吐・下痢、歯茎よりの大量出血などの病症を垣間見ることができる。このうち、喉痛・胸痛では、曲直瀬玄鑑による投薬治療を受けている。また、曲直瀬玄朔の診療日記「医学天正記」より蛔虫症に細菌性の下痢が加わるといった病状を窺い見た。さらに、歯茎よりの大量出血については、慶長13年とみられる9日付芳春院の書状が、尊経閣文庫にあり、また、芳春院は2年続けて歯茎より出血したという（千代宛9月9日付利長書状、センチュリー文化財団所蔵、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫寄託）⁽⁸⁾。

上記の曲直瀬玄朔（1549～1631、正紹、道三、延命院、延寿院）は、曲直瀬道三正盛（1507～94）の嗣子で、文禄元年（1592）秀吉の征明軍に従い肥前名護屋へ向かい、毛利輝元の療治のため渡韓、翌年帰国、同4年豊臣秀次切腹に侍医の故をもって水戸に配流、のち後陽成天皇を治療、赦免され、慶長13年秀忠の加療のため江戸に赴き、屋敷を拝領、隔年江戸に居住する。また、曲直瀬玄鑑（1577～1626、今大路道三、親純、親清）は、元朔の子、幼時より秀忠に仕え、東福門院（秀忠娘和子、後水尾天皇の中宮）の難産（のち明正天皇）を治療し、寛永3年（1626）秀忠に従い京都に滞在中、崇源院（秀忠室）の病用に江戸へ帰る途中箱根で没する⁽⁹⁾。ともあれ、芳春院は玄朔・玄鑑の在江戸の時、治療を受けたことになる。

ほかに、芳春院は病気の治療として、鍼灸や湯治を行なっているが、元和3年（1617）7月16日金沢城にて没する。なお、[表2]において、慶長15年とみられる村井長次宛の芳春院消息における村

井長次は藩老村井家の2代目で、慶長10年利家と芳春院との娘千世を正室とする。

三、利長らの病と治療

利長は天正13年（1585）越中3郡（砺波・婦負・射水）を秀吉より拝領し、慶長2年（1597）越中守山城より富山城に移り、翌3年父利家の隠居により前田家2代目となり襲封、同5年南加賀2郡（能美・江沼）を家康より拝領、10年利常に3代目を継がせ隠居し金沢城より富山城へ移る。14年3月富山城火災のため、魚津城に移り、築城した高岡城に同年9月引き移る。この高岡城における利長の病と治療について、まず、これまで『藩史料』などに翻刻されている史料を手がかりに、可能な限り原本に当り、その概要をまとめる。次に、未刊の史料を翻刻し検証を試み、概要を把握する。さらに、病気の治療を担当した医家、盛方院などについて素描する⁽¹⁰⁾。

（1）翻刻史料などにみる利長の病と治療

利長の病と治療・医家について、これまで『藩史料』等に翻刻された史料をもとに整理し、[表3]に示した。

[表3] 利長の高岡での病と医療

番号	年月 〔西暦〕	年齢 (歳)	主な内容 (症状・病名、治療医、諸方対応等)	典拠史料
1	慶長15年〔1610〕 3月27日	49	徳川秀忠は利長に宛て、腫物煩いにつき、療養専一と見舞い状を書く	「加藩国初遺文」 8巻
2	同 4月朔日	同	秀忠は利長に宛て、所劳心許無く、重ねて溝口伯耆（宣勝）を遣わし、油断なく療養すべきと書状を送る	「同」8巻
3	同 4月4日	同	利長は幕府の本多佐渡守（正信）・大久保相模守（忠隣）に宛て、先の秀忠の御教書を請け、腫物の義御下知を加えられ、礼状を書く	「同」8巻
4	同 4月9日	同	利長は本多佐渡守・大久保相模守に宛て、重ねて御教書を頂戴し、溝口伯耆守を指下し、腫物の義添き上意につき礼状を書く	「同」8巻
5	同 4月10日	同	徳川家康は利長に宛て、煩い心許無いゆえ、使者を指遣わし、養生専一のこと見舞状を送る	「同」8巻
6	同 4月18日	同	利長は本多上野介（正純）・村越茂介（直吉）にあて、先の家康の御教書を頂戴し、岡田新三郎殿を指下され、腫物の義添き上意につき礼状を認める	「同」8巻
7	同 12月15日	同	本阿弥光悦は、今枝内記重直に宛て、利長の御腫物が未だ治らないのは氣の毒だが、少しだかまりを取り除き、何かにつけて楽しむ気持ちを持ち、色々工夫して過ごすと良いことなど書き送る	「本阿弥光悦書状」
8	慶長16年〔1611〕 2月2日	50	徳川秀忠は利長に宛て、所劳を御見舞い、療養専一として、鷹狩りの雁20を送る旨書状を出す	「加藩国初遺文」 8巻
9	同 2月15日	同	利長は幕府本多佐渡守・大久保相模守に宛て、過日の徳川秀忠の御内書を頂戴し、雁20拝領、所劳につき養生の旨御下知につき御請状を書く	「同」8巻
10	同 2月16日	同	利長は山崎長徳に宛て、自ら上洛しないこと、腫物が再発し、特に外くるぶしを病み、長らく立っていることができず、つとめて養生することを告げる	「山崎文書」 「加賀古文書」

11	同 2月20日	同	利長は腫物が特に再発し、山崎長徳にその子阿波守長郷の存する薬師の周旋を依頼する	「山崎文書」 「加賀古文書」
12	同 2月28日	同	利政は神尾図書（之直、利長重臣）に宛て、利長の娘満姫の煩いにつき、思いがけず相果てた（21日）由承り、お悔やみの書状を書く	「前田利政書状」
13	同 5月15日	同	利長は利常に宛て、腫物再発し、行歩叶わず、病気ゆえ不甲斐無く、存命のうちに万端両御所様仰出の御置目を守り、諸事家中仕置き油断なき事などの思いを書状に認める。また、前田対馬守（長種）等家臣らに腫物が再発し、行歩叶わず、病気ゆえ不甲斐無く、存命のうちにとの思いで申出の条々を書く	「加藩国初遺文」 8巻
14	同 5月27日	同	利常の意を受け、奥村栄明・篠原一孝・横山長知は、尾張熱田の神職龍大夫に、利長の不例につき平癒祈念として神前にて大々神樂を致すよう申し入れる	「尾張熱田松岡氏伝記」
15	同 6月4日	同	利長は幕府老臣本多佐渡守・大久保相模守に宛て、腫物煩い、所労ではあるが、腫物が平癒し、行歩が叶えば江戸へも行ける故、芳春院の帰国を許さぬよう、また、盛方法印・慶祐法印を遣わされた故、養生する旨書状を認める	「加藩国初遺文」 8巻
16	同 6月15日	同	利長は幕医盛方法印に宛て薬を処方以降、女方等の義は無用にて不養生なことは控え、食事も好物は慎むことなど、起請文を書す	「同」 8巻
17	（同カ） 6月17日	同	利長は藤堂和泉守（高虎）に宛て、所労・腫物の義につき、此頃上方より盛法印・慶祐法印頼入り御下向により薬治療などの効き目が少し現れしたこと等書送る	「同」 8巻、 「国事雑抄」 6巻
18	（同） 6月20日	（同）	前田利政は神尾図書之直に宛て、利長の病に対し盛方院（吉田淨慶カ）の薬が大方効き目があったとのことで、大慶、満足であると書状を書く	「前田利政書状」
19	同 6月27日	同	徳川秀忠は利長に宛て、盛方院・慶祐を下国させ治療に当たらせ、養生肝要と書き送る	「加藩国初遺文」 8巻
20	同 7月6日	同	利長は幕府本多佐渡守・大久保相模守に宛て、煩いのため上意として幕医盛方院が江戸当番のところ遣し下され治療・処方薬の効き目があったこと、慶祐法印の治療もうけたことなど、礼状を書す	「同」 8巻
21	同 8月29日	同	利長は利常に宛て、諸篇常々用所の義を質問してくる事は病中の礎になる故、金沢にて年寄共と相談し良きように極めるよう、また、見舞いに来るのは無用のことなど条々書き送る	「万治以前定書」
22	同 11月10日	同	利長は大久保相模守に宛て、病気再発のため盛方法印下向につき礼状を書く	「加藩国初遺文」 8巻
23	同 12月2日	同	利長は直江安房守（本多政重）に宛て、盛方法印が下向し、その治療を受け、効き目を得たこと等御礼の書状を出す	「本多氏古文書等」 2巻
24	同 12月4日	同	利長は幕府老臣本多佐渡守・大久保相模守に宛て、家康・秀忠の見舞状を謝し、腫物平癒は難しく、行歩叶わず、長患いにつき従臣を少々金沢へ引越させたこと等御取り成しの了解を求む	「加藩国初遺文」 8巻
25	慶長17年 〔1612〕 正月23日	51	豊臣秀頼は芳春院に宛て、高岡の利長のもとへ盛方院を遣わし、処方薬の効き目が有る由伝え、芳春院に対しても息災か安否を問う	「豊臣秀頼自筆書状」「加藩国初遺文」 8巻
26	同 閏10月8日	同	利政は神尾図書之直に宛て、利長の腫物が再発し、痛のこと、返書の見舞状を書く	「前田利政書状」

27	同 閏10月24日	同	利政は神尾図書之直に宛て、利長腫物再発早々御快氣の由目出度きこと、盛法印下向にて養生薬効き目あり治定のこと等返書をかく	「前田利政書状」
28	慶長18年〔1613〕 4月14日	52	利長は病気は以ての外のこと（思ってもみないこと）使者をもって音物を幕府に贈る。一説では利長の病は虚病であり、欺きとの謳歌があらわれる	「天寛日記」46冊本26巻
29	慶長19年〔1614〕 3月13日	53	本多政重は河合忠兵衛・松本権丞に宛て、腫物が再発し、手足が不自由で歩行困難だが、京へ引越し隠居知行を徳川へ返し、死没したら国にて葬礼を希望しているとの利長の意中を幕府に伝えて欲しい旨覚書を認める	「本多氏古文書等」2巻
30	同 5月20日	53	唐瘡の煩いにて利長は死去、53歳、この年春ころより例ならぬ心地にて、金沢の医師・針立が指し集い、治療するが、次第に重病となり、逝去する	「慶長年録」「三壺聞書」9巻

「前田利政書状」は前田育徳会所蔵（『新修 七尾市史 3 武士編』七尾市役所、平成13年）、「豊臣秀頼自筆書状」は京都芳春院所蔵（『大坂の陣 400年祈念 特別展 豊臣と徳川』大阪城天守閣、平成27年）、「本阿弥光悦書状」は京都光悦寺所蔵（京都国立博物館図録『琳派 京を彩る』平成27年）、「山崎文書」は金沢工業大学蔵（写真）、「天寛日記」は内閣文庫蔵を活用。また、「尾張熱田松岡氏伝記」及び「慶長年録」は原本未確認で、『藩史料』に依った。

〔表3〕 7番の本阿弥光悦書状は、年次の12月15日付の今枝内記宛てのもので、図録では慶長4年以降の書状としているが⁽¹¹⁾、次のことがらから慶長15年に年次比定することが可能である。なぜなら、書状の中で「御まんとのハ御手習ニ候哉」「御腫物いた」治らずと見えるからである。また、光悦は利長の病に対し、楽しむ心をもって工夫し過ごすことを勧めている。「御まん」は利長の娘満姫で、〔表3〕の慶長16年2月28日の項に関連するが、同年2月21日に没している。この書状のように、満姫が生存しており、なお且つ利長の腫物が発病している年を考えると、この書状は慶長15年12月15日のものと年次比定できる。

なお、慶長16年2月28日、利政は神尾図書之直に宛て、利長の娘満姫の病没の報を受け、驚入り、是非に及ばざる次第と書状を書き送っている（〔表3〕12番）。

次に、22番の慶長16年11月10日の条の史料に関し、「加藩国初遺文」8巻では明確な年次の記載はなく、編者の森田平次の考証では、「右年譜載之係于慶長十七年、按ニ五月五日付直江安房守ヘノ親翰ニ拙者事、自旧冬腫物再発云々ト載玉ヘハ、十五年ノ冬ヨリ再発シタリト聞ユ」と見えるが、『藩史料』では16年の条に比定し収載している。これは盛方院の下向、治療の年が16年であることに基づいているものとみられる。

さらに、利長の病に対しても徳川から前田家に医者を派遣している。例えば15番の慶長16年6月4日の事例にも見られる。また、利長は腫物が治れば江戸へ行けるゆえ、芳春院を帰国させないように述べており、ここには偏に前田家の安泰を願う利長の強い意志が窺われる。また、徳川方は利長が本当に病気かどうか、確かめるためにも医師の盛方院を派遣する意味もあったものとみられる。この背景には、徳川との綿密な情報交換をして相互の関係を保っていたものとみられる。利長は豊臣恩顧の大名だったから、或いは祈禱と称して、調伏する場合もあり得たのではなかろうか。

因みに、盛方院については後述するが、〔表3〕15・17・19番にみえる慶祐（1546～1614）は曾谷寿仙ともいう。父に継いで医を業とし、天正11年法眼に、同14年法印に昇り、のち「豊臣太閤腫物」の治療に当たり、文禄4年「台徳院（徳川秀忠）殿腫物」に薬を献上、慶長16年には後陽成院の病に薬を献上し、のち「外科伝語二巻」を撰するなど、腫物等外科を専門としていたようである⁽¹²⁾。

以上、〔表3〕より利長の病、腫物をめぐる様子について、次のようにまとめることができる。1点

目に、家康・秀忠など幕府よりの見舞いの書状・金品、これに対する前田家からの礼状、2点目に、幕府から医者盛方法印・慶祐法印の派遣と治療、及び症状の緩和、また、豊臣秀頼より芳春院へ宛てた利長らの見舞状、これに関する書状、3点目に、行歩叶わず、存命の内に家中仕置など、統治に関する利長の申渡し、4点目に、家臣山崎長徳に本多長郷存知の医者派遣の要請、5点目に、病平癒のため神仏への祈禱の申入れ、などである。

このように、少なくとも慶長15年から19年の足掛け5年の間、隠居の身であるとはいえ、利長は腫物に苦しみ、時には歩くことも叶わず、度重なる不安の中で、領国内の仕置きや前田家の安寧を願っていた様子が窺われる。

なお、「乙夜の書物」3巻(加越能文庫)によれば、天正期利長は越中守山に在城のとき、みかんを40~50食し虫気が差出て御大事となり薬師衆が薬を処方し、夜ようやく快気したという逸話がある。また、「又新斎日録」4巻(同)によれば、慶長年中、明の儒者王伯子を召し、その書贊のある山水画が金沢の医者津田豹阿弥所蔵の逸品の中にかつて存在したという。ここには利長・王伯子・津田豹阿弥の文化的志向の一端が窺われる。

ところで、利長の正室玉泉院(織田信長娘)は、利長とともに高岡在城のとき「必(間違ひなく)氣鬱のかたまりと成ル」(「三壺聞書」8巻)などと見え、氣鬱の病に罹ったという。また、元和9年(1623)50歳にて没するが、病、死因については定かでない。

(2) 「北徵遺文」所収聖安寺文書の翻刻と利長の腫物と治療

次に、利長の病と治療について、「北徵遺文」8巻(石川県立図書館森田文庫)所収の聖安寺文書の未刊史料を紹介しよう⁽¹³⁾。

[1] 利長書状、11月朔日付

聖安寺^ム見事之寒菊くれられ候、此比未稀之事候、心付之通、令満足之旨、能々申度候、
かしく、

十一月朔日 御判

^(朱書)
「以下十五通御直筆也」

[2] 利長書状、脇田九兵衛・大橋左内宛、19日付

× 九兵^ヘ (脇田直賢、詰小将衆、230石)
左内 (大橋左内、大小将衆、200石)

ひ (肥前守利長)

聖安寺^(ム) しやうあんしそれ二いられ候や、しゆもつもちとくろミものき申候やうニ御入候かと存候、

ミられ候ハ、出し、ミセ可申候、それにおよはす候ハ、出申ましく候、

かしく、

十九日

[3] 利長書状、脇田九兵衛・大橋左内宛、11月15日付

× 九兵^(衛) ひ
左内

今日のくすりなく候間、しやうあん寺をよひ候ハヽあわさせ可申候、昨日のくすりのミ申候、一たんふく中もよく候由、可申候、又今日ひよく候間、かのきうおも只今いたし申候由可申候、

以上、

十一月十五日

[4] 利長書状、聖安寺宛、11月15日

メ せうあん寺 ひ
まいる

我々しゆもつのくすり給候ニついて、あミたほぞんにうらはんのすミつき給候、誠々ねんの入候事まんそく候、我々ふたんのしほきくい物などにぎんミいたし候間、ねんの入られ候事、一入まんそくと、其方へたいし、きづかいニてハなく候、ふたんのしおきのていに候間、其心へニて可被下候、

十一月十五日 かしく、

[5] 利長書状、監物・脇田九兵衛宛、11月16日

メ けん物 ひ
九兵へ

一昨日きうをいたし、くすりをのミ候て、しゆもつすこしうつきやミ申候やう候、一、ふく中いよいよよく候、かわる事候ハヽ可申候、

十一月十六日 以上、

[6] 利長書状、聖安寺宛、11月17日

メ しやうあん寺 ひ
まいる

一、とくたちの事、心へ候せんとおろし申され候、さんりの二ツノきうまでいたし申候間、下のきう今日いたし可申候、ふく中かわる事なく候、

十一月十七日 以上、

[7] 利長書状、聖安寺宛、11月21日付

「後」メ しやうあん寺 ひ
まいる

一、ふくちうかわる事なく候、

一、しゆもつ一たんやハラキ申候、

一、そとくろふしのしゆもつうづき候へ共、さしたる事なく候、つけくすりにてハ、いへす候、あかり申かと存候、

かしく、

十一月廿一日

[8] 利長書状、脇田九兵衛・大橋左内宛、11月20日付

「前」 ×

九兵へ^(衛)
左内

ひ

(内山覚伸) (聖 安) かく申しやうあん寺朝出られ候ハヽ、いかにもねんの入、めしをふるまい候へく候、大所
(念) (飯) (振舞) (台)
人に申つけ候ハヽ、まい朝ふるまい候へく候、以上、

十一月廿日

[9] 利長書状、11月22日付

此由物語候へく候、

かしく、

十一月廿二日

(聖 安) (詰) (朝) (振舞) (念)
しやうあん寺よくつめられ候、あさ夕ふるまいの事、よくねんの入可申候、かやうに
(骨 折) (自然) (毒) (食) (存)
ほねおりの所ニせん我々どくなとくい申候事、あるへきなど、そんせられ候事もあるへ
(弓 矢) (幡) (毒) (少) (食) (養 生)
し、ゆミや八まんとくなとすこしもくい不申候、又一義の事ハ叶ハせんらようセうのため、
(円) 一ゑんなく候間、(原文ノママ、以下冒頭へ続くカ)

[10] 利長書状、脇田九兵衛・大橋左内宛、11月23日付

×

九兵へ
左内

ひ

(昼 時 分) (虫 指) (薬) (先) (服) (煎)
今日ハひるじふんらむしさし出候間、明日のくすりハまつ一ふくせんし候て、あけ候へく
(崇) (足) (弥 々)
候、くすりのたゝりにてハ候ましく候と存候、あしハいよいよくつろき申候、以上、
十一月廿三日

[11] 利長書状、聖安寺宛、12月2日付

×

しやうあん寺

ひ

(付 薬)
つけくすりなく候ハヽこれる可申候、

一、むし心もさきほどらやハらき申候、

一、かう物之事心へ候、

一、くろふしの所まへのことくにハ、うつき候ハねとも、おし候へハ、うミハ上へすこし
つゝ出申候、大きにわなり不申候、

一、あしかうのおりめの物、まへらハ、大方いへより申候、

一、くさミハまへのことくにて候、

かしく、

十二月二日

[12] 利長書状、脇田九兵衛・大橋左内宛、正月30日付

× 九兵^(衛)
左内 ひ

せいあん寺ないやくのに、入くわへ、おなしの内やくをのミ度候、それにても一たんよく
御入候つる、かく中・道かんへもだんかうさせ可申候、
正月卅日 以上、

[13] 利長書状、聖安寺宛、2月1日付

× せうあ寺^(聖安)
まいる ひ

我々しゆもつに 御所さまらはいれうのうんけんかうのかうやくをつけ申候、かようの
しゆもつにもよく候や、あまりうづき申候間、つけ申候、あまりつよきこうやくにて候ハ
、はんらハつけ申ましく候、
二月一日 かしく、

[14] 利長書状、聖安寺宛、2月2日付

× せうあ寺^(聖安)
まいる ひ

しゆもつかわり事なく候、今夜もうづき申候、くすりハ一昨日のくすりのことくに候や、
昨日のくすりハ、一昨日のようちとあぢかちかへ申候かと存候、今日二ツのきゆ^う(灸)いたし度候、
二月二日 かしく、

[15] 利長書状、聖安寺宛、2月3日付

× せいあ寺^(聖安)
ひ

しゆもつ今夜ハちといつらうづき申候、ふくちうもすこしこわりして、夕部・けざくるし
申候間、あまりくるし申候かけんハ、むようニ候へく候、
二月三日 以上、

[16] 利長書状、聖安寺宛、2月11日付

× せいあ寺^(聖安)
まいる ひ

くすりなへ候間、可給候、今夜さしてうつき不申候とて、よおもよくふせり申候、ふく中

（変）
もかわる事なく候、

二月十一日

かしく、

〔17〕利長書状、市川長左衛門・宮井二郎右衛門宛、正月7日付

× 市川長左衛門 肥
宮井二郎右衛門

年頭祝儀として聖安寺より鳥目五十疋くれられ候、満足のよし、心へ候て可申候、

かしく、

正月七日 利長御印

（朱書）
「右高岡一向宗聖安寺藏」

〔「加藩国初遺文」8巻（加越能文庫）註書〕

「北徵遺文」における上記〔1〕～〔17〕の史料は「加藩国初遺文」8巻にもほぼ同文で収録されており、右17点の史料のあとに、編者森田平次による次の註書があるゆえ、紹介しよう。

右十七通北徵遺文載之、

原書ハ越中国高岡聖安寺所藏、

按ニ右聖安寺ハ本願寺派真宗ノ道場ナリ、其頃ノ住職医道ヲ心得、殊ニ功者ナルニ依テ、御療

養方ヲハ被命タルナルヘシ、又右 御真筆ノ親簡中ニ、（内山覚仲）かく中・道かんへもだんかうさせ可申
ト載玉フ、かく中・道かん皆扶持シ玉ヘル医師ノ名ナリ、元和元・二年ノ土帳ニ、三百石 内
山覚中、百石 道閑ト記載シ、寛永四年ノ土帳ニモ御薬師衆 三百石 覚中、百二十石 道閑

トアリ、諸士名言録云、元祖内山覚中ハ 瑞龍公富山ニ御在城中被召出、今富山ニ覚中町ト
称スル地、即チ覚中ノ居跡ナリト云、

又按ニ右親簡共ニ、九兵ヘ・左内ト載玉ヘル、九兵衛ハ脇田九兵衛直賢ニテ、左内ハ大橋左内
也、

一、慶長十年富山御隠居士帳ニ、

大小将衆 二百石 大橋左内

詰小将衆 弐百三拾石 脇田九兵衛

一、脇田如鉄自伝云、文禄元年ノ暮、備州岡山ニ来ル、秀家卿の室孤を憐ミ給て、御母公ヘ翌
年被送る時、予八歳也、御母公御慈悲の余り御嫡子中納言利長卿へ被送遣御母子両君の養育
を以て人と成、利長卿越中富山江御隠居の刻も彼地へ被召連、若輩の処、恩賞の地百石拝領、
其後百三拾石御加増、近習御奉公申上ル、加越能の大小身農工商ニ至まで大半、予諸事之取
次を被 仰付、然処ニ妻子依不帶、脇田氏先生重之か姪に嫁シ、姓を改て、脇田トシ、弥御
近習盛ンなるに依て、為讒者一ヶ年の内閉居ス、云々、又云、 瑞龍院様御代三ヶ国小取次
被 仰付、某と大橋左内宛所之御直書方々ニ而有之、云々、

上記史料の内容についてみると、原本は越中高岡の本願寺派真宗聖安寺所藏であること、同寺の
住職は医道を心得ていたこと、九兵衛は詰小将衆の脇田直賢で230石、左内は大小将衆の大橋左内で
200石であることなど、編者森田平次の考証が付け加えられている。また、藩医の内山覚中・藤田道

閑の当時の石高につき、加越能文庫の侍帳よりみると内山覚仲は300石、藤田道閑は100石から120石に加増されており、上記史料の内容と一致していることがわかる⁽¹⁴⁾。

なお、上記史料は、多くは九兵衛・左内に宛てているが、〔5〕の「けん物」とは誰なのかに関して、「慶長年中御家中分限帳」（「慶長延宝加陽分限帳」）に恒川監物、篠島監物、生駒監物（御小将分、1000石）などが見える。これらも含め、今後検討していかなければならない。

ともあれ、先の〔1〕～〔17〕の史料は、ほぼ次のようにまとめることができる。1点目に、聖安寺より利長への進上金品とその礼状（〔1〕～〔17〕）、2点目に、腫物の痛みと腹中の傷、内服薬、付け薬、灸など、聖安寺による治療（〔2〕～〔7〕、〔10〕～〔12〕、〔14〕～〔16〕）、3点目に、当時、治療医家として聖安寺だけでなく、内山覚仲・藤田道閑による談合のうえ、治療が行なわれていた様子、さらに、覚中・聖安寺への振舞いのこと（〔8〕～〔9〕、〔12〕）、4点目に、聖安寺の待遇と養生の心得（〔9〕）、5点目に、御所様（家康）より拝領の膏薬にて治療していること（〔13〕）などである。このうち、特に〔11〕の史料は、利長が聖安寺に宛て、腹中の虫も和らぎ、薬味のことは心得た、くるぶしの所は前のようにはうずかないが、手で押すと膿が少しづつ出てくる、足の甲の辺は前よりは良くなっている。臭みは前の如くである、付け薬がないなら、自分から申しておく、というような内容であり、これらには利長の腫物の症状が痛々しく、且つ生々しく描かれている。こうした病状も一進一退を繰返していたものとみられる。

（3）「村井文書」2巻、「神尾文書」「沢存」の翻刻と利長の病

次に、未刊史料として「村井文書」2巻、「神尾文書」「沢存」（いずれも加越能文庫蔵）の中から主なものを翻刻・紹介し、利長の病について、垣間見ることとしたい。

〔18〕「村井文書」2巻、芳春院消息、千世宛、11月6日付

返々ひせんのやうたいとをとをにてとりとりニ申ごし候まゝ、あんしいりまいらせ候ま
てにて候、われわれいとまの事、いろいろさいかく申候へ共、なかなかになり申さす候、
うらめしき事にて候、ちゝもしへのこそて、ふたりへの文まいらせ候、そなたの
ひやうふしたちか御入候て、おし候はんと思候へハ、ちいさく候ハ、いま又こしらへ
申候、おそくまいまらせ候、
かしく、
たより候まゝ一ふて申まいらせ候、せいほうふんさゝいて、くわゝりまいり、おもけもす
きすきと候へかし、とねんし申候までにて候、おほちもちかちかにさんのよしにて、ゆわも
まいりたかり候へとも、時分にてたり候ハて、ミツをつかい申候、そこもどちかちかにて、
御入候まゝ、よろつきもいられ候べく候、
かしく、
十一月
六日
おちよまいる
申給へ

ら
(芳春院)
はう

[19] 「神尾文書」 1巻、利長書状、神尾図書宛、(慶長17年) 閏10月8日付

(図書、神尾之直) つしよ まいる	(肥前守利長) ひ
-------------------------	--------------

我々きやいかわル事なく候、きんハまへのことくうすうすかわニなり申候間、心やすく候へ
く候、又セイほういんのやとせられ候由、たいきとも候、まんそく申候ようの事、申さるへ
く、にハかニハ、どうぐふせいもあるましく候間、此方へ申さるへく、
かしく、

(慶長17年)
後十月八日

[20] 「神尾文書」 1巻、利長書状、神尾図書宛、7月9日付

(図書) つしよ まいる	ひ
--------------------	---

(主馬) (未) (礼) (遣)
しめ所へいまたれい四人おも、つかい不申間、よく心へて給候、
(今度) (盛方院) (主馬親子) (進) (書付) (法印) (主馬) (衍カ) (者) (遣)
こんとセイほういんへしめおやこらしんし候かきつけ、并ほういんらしめ内うちの物へつかハ
れ候もくろくミ申候、こんとハほういんのやとをいたし、ぞうさとものよし申度候、

以上、

七月九日

[21] 「神尾文書」 2巻、利長書状、神尾図書宛、7月7日付

(図書) つしよ まいる	ひ
--------------------	---

(礼) (頼)
よくれいとも申さるへし、たのミ入候、
(態) (盛方院) (通) (今度) (薬) (本復)
わさと申入候、依セイほういん御尋とほりの由、こんとハ御くすりにて、ほんふくいたし候
事、誠ニ忝存候、御いとまこいニそれまでまいり候てなりとも可申所ニ、いまたこしたち不
申候間、つしよを以、御れい申入候由、其方まいりよく申さるへく候、
七月七日

以上、

[22] 「神尾文書」 2巻、利長書状、神尾図書宛、2月9日付

(図書) つしよ	ひ
-------------	---

内々申候物とも、どらへ申され候由候、よきてうぎをせられ、しうなしをよくどらへ申候、
我々も此間おもてへ出候て、きゝ度候へ共、うでニしゆもつ出来候ていたミ、さんさんの

(躰) ていにてある事候間、出す候、しうのある物おも、とらへ申候由もっとも候やと、いけまで
(捕) とらへ申事、きひよき事候、早々加州ニい申候おも申つかいとらへ度候、
(氣味) 二月九日
(居) (遺) (捕) かしく、

[23] 「神尾文書」 2巻、利長書状、神尾図書宛、5月30日付

(図書) つしよ
まいる ひ

(態) わさと申入候、依ちくせんわつらい大方ハよく候へ共、いまたこゝもとへこし可申ていにて
(筑前、利常) (煩) (良) (未) (此許) (越) (躰)
(年頭) (礼) (誰) (越) (往か) なく候間、ねんとのれいの事ハ、たれにてもこし候やうニ、ゆきにて申され候て、よく候へ
(見舞) (昔) (頑丈) く候、此方ハミまいの事、むかしらがんでうニなり候ハすハ、これら申とめ候へく候、
かしく、

五月廿日

[24] 「神尾文書」 2巻、利長書状、神尾図書宛、11月12日付

(筑前、利常) (我等) (聞) 尚々、ちくせんと申物はわれら申事をゆめほともきかず候間、かやうの事申候も
(心許無) こゝろもとなく候、 かしく、
(筑前書状見) (盛方院) (振舞) (由) ちくせんしよじやうミ申候、せいハういんふるまい候ハんよしに候、もつともにて候、しか
(難) (嫌) (此許) (振舞) (要) (存) しながらむつかしき事、いやがられ候間、こゝもとにてふるまいはいらさる事とそんし候、
(上) (時分) (何) (泊) (振舞) (由) (堅) のほりのじぶん、いつれのとまりにても、ふるまはれ候やうにて申へく候、此よしかたく申
(遣) (参) (鷹) (雁) (角髪、奥村栄頼) (遣) (得) つかわしまいらせ候、たかのかん式つつかわし申候、よく心へ候て申さるへく候、
十一月十二日 (印字「長盛」利長)
つしよ

[25] 「神尾文書」 2巻、利長書状、神尾図書宛、6月26日付

(筑前、利常) (使) (浅野將監五郎右衛門、物頭) (越) (由) (盛方院) ちくせんところよりつかいとして、あさのせうけんこし候よしに候、せいほういんへ
(餓) (我々) (隠居) (応) (遣) (間) (由) はなむけの事、われわれいんきよにおうし候ほと、つかわし申へく候あいた、此よし申へく
(筑前) (頭) (餓) (由) 候、又ちくせんところよりかしらにて、はなむけせられ候ハんよしに候、そのいんしゆぎ、
(今) (指図) (様子) (由) (由) (使) (良) いまさしづハならす候やうすにより、これより申へく候、此よしししやへよく申へく候、
(念) (満足) (由) (懇) (良) (女) (書) ねんを入られ候て、まんそくのよし、ねん比ニよく申へく候、かやうのおんなのかき申候
(文) (頭) (遣) (得) ふミ、かしらなどへつかわし申ましく候、その心へまいらせ候、

(印字「長盛」)
六月廿四日 (印)

[26] 「神尾文書」3巻、前田利常書状、神尾図書宛、12月22日

謹令言上候、然者盛法印下国之儀ニ付、秀頼様へ為御礼以宮城采女申上候処、片桐市正所より返札為御披見令進上候、路次中無異儀、京着被仕候由候、委細采女可申上候、此等之旨、宜預御披露候、恐々謹言、

十二月廿二日

松平筑前守
利光 (花押)
(利常)

神尾図書殿

[27] 「沢存」利長書状、神尾図書宛、5月2日付

(つし□ へ ひ)

さきへあんなへ可申候、

三吉いなは殿御ミまへのよし候、かたしけなき事候、御けさんニいり可申候、御ふるまいな
と申入、御目ニかゝり度候へ共、すねのしゆもつゆへ、ちやうざならす候、其方そんしのこ
とく申入候へく候、まつ御目ニかゝり可申候、

五月二日

かしく、

以上、[18]～[27]の史料をまとめると、1点目に、母芳春院が娘千世に宛て、利長の病を案じており、盛方院も治療に加わり、保智（利家娘、慶長19年没）の日参の由、岩（保智の生母）⁽¹⁵⁾も参りたがっていることなどを書き送っている（[18]）。2点目に、利常は利長の重臣である神尾図書（之直、のち9000石）に宛て、盛方院の下国につき、秀頼様へ御礼として宮城采女（長成、700石のち1300石）をもって申し上げたところ、片桐市正（且元、秀頼の後見）の所より返札があり、この度盛方院は（利長の治療を終え）、路次中無事京着されたこと、利長に報告するよう命じている（[26]）。3点目以下は、神尾図書（之直、のち9000石、利長重臣）に宛てた利長の書状である。特に盛方院に対する宿の造作、振舞い、餞のことなど（[19] [20] [24] [25]）、盛方院の薬で（一時的にカ）本復したこと（[21]）、腕にも腫物が広がり、痛みが甚だしく、また、脛の腫物のため、長座が出来ないこと（[22] [27]）、「三吉いなは殿」（三好因幡守一任、信長・秀吉・家康・秀忠らに仕える）⁽¹⁶⁾等見舞いのこと（[23] [27]）、など利長は図書に書き送っている。

次に、[20]の史料にみえる盛方院の宿を担当した主馬について触れておきたい⁽¹⁷⁾。当時主馬を称していた者をみると、「高岡衆分限帳」では、「利長公慶長二年越中森山（守山）より富山江御移被成、同四年金沢御越被成、同十年富山江御隠居之時分被 召連候人数之覚」として、4000石、大音主馬の名が見え、また、同史料中、大小性衆として250石、大井主馬丞が記され、さらに、「慶長十六年八月八日ニ金沢江被遣候衆」として4000石、大音主馬が見える。また、慶長10年「富山侍帳」には、右大音主馬のほか、大井主馬（250石、大小将衆）が、さらに「慶長之侍帳」には、野村主馬（100石）、近藤主馬、堀田主馬が、また、「慶長年中御家中分限帳」（「慶長延宝加陽分限帳」）には、奥野主馬（5000石）、本庄主馬、行山主馬（200石）などが見える。このほか、忍びの者であるという四井主馬も知られる。

さて、慶長16年6月4日には盛方院は高岡に下向し、利長の治療に当っており（[表3]）、「主馬」

は大音主馬厚甫（〈明治2年「先祖由緒并一類附帳〉厚用とも。「諸土系譜」は好次。大井久太郎直泰の子、故有り、大音に改称。厚甫の嗣子は主馬好政）に比定できようか。このように考えると、この治療の後、同年8月主馬は金沢に遣わされていることになる。したがって、〔20〕の史料は慶長16年であろうか。なお、玉川図書館近世史料館蔵「前田肥前守御書」（091.0-238）に「おとうしゆめの介」などと見える。ともあれ、今後〔20〕の史料を中心とし、これら「主馬」の人物比定等が課題として残された。

（4）盛方院と利長の治療

次に、利長の治療に当たった盛方院について、述べていきたい。

『新訂寛政重修諸家譜』卷5によれば⁽¹⁸⁾、盛方院は吉田と称し、その祖は丹波康頼（912～995）の後胤典薬頭頼基より出で、数代が近江国志賀に住し、初め志賀と称す。のち淨勝のとき吉田に改めたという。また、家祖淨快の父は淨貞といい、淨快は坂土仏の猶子となり、近江坂本に居し医業を始めたという。以下、略系図を示しておこう。

①坂淨快（坂土仏四男、近江坂本にて医業、称光院〈1401～28〉へ薬を献じ、法眼、法印、秘法二十八剤を撰）＝
②淨秀（宮内卿、盛方院、法印、実は典薬頭篤直二男、後花園院〈1419～70〉に薬を献、鴻宝秘要抄を撰、=は養子を示す、以下同）—③淨孝（治部卿、盛方院、三位法印、医業、癩病治す、捐仙方を著）—④淨喜（宮内卿、盛方院、法印、足利義尚〈1465～89〉の病を治療、直済方を著）—⑤淨運（治部卿、盛方院、法印、明応年中〈1492～1501〉明に留学、後柏原院〈1464～1526〉に薬を献上、山名因幡守に医術を教え、新撰方三十一巻を著）—⑥淨見（宮内卿、盛方院、法印、医術等学び、増損附益抄を著）—⑦淨盛（治部卿、盛方院、法印、医業、古今を伝授し抄を撰）—⑧淨忠（宮内卿、盛方院、法印、正親町院〈1517～93〉及び足利義昭〈1537～97〉に薬を調進、永禄8年〈1565〉没、年55、淨忠小双紙を書）—⑨吉田淨勝（治部卿、盛方院、法印、医業、織田信長〈1534～82〉の病を治療、天正12年〈1584〉没、年35、妻は細川兵部大夫家臣松井山城正之の娘、達源方二十二巻を撰）=⑩淨慶（宮内卿、盛方院、法印、実は淨忠二男、後陽成院〈1571～1617〉の薬を調進、文禄元年〈1592〉豊臣秀吉に隨い名護屋の陣所に赴き、のち徳川家康に仕え、駿府・江戸に参り、御番を勤める、慶長19年〈1614〉没、年61）=⑪淨珍（治部卿、盛方院、法印、実は淨勝の子、慶長16年〈1611〉勅により大典侍局を治療、のち家康に仕え、大坂の役に供奉、元和7年〈1621〉没、年39、妻は細川越中家臣松井佐渡康之の娘）—⑫淨元（宮内卿、盛方院、法眼、法印、元和7年相続、500石、徳川秀忠に11歳で初拝謁、寛文9年〈1669〉年59）—⑬淨友（隆友、治部卿、盛方院、法印、寛文9年相続、10年法印、元禄3年〈1690〉小普請、享金方を著、同12年没、年54）—⑭淨仙（宮内卿、盛方院、法印、貞享4〈1687〉徳川綱吉に初拝謁、元禄12年相続、同年寄合列、法印、13年奥医、同15年改易、宝永5年〈1708〉没、正徳3年〈1713〉赦免）=⑮真陽（快隆、正徳3年小普請、兄淨仙の跡相続、翌年20人扶持、寛保元年〈1741〉寄合列、同年番医、宝曆2年〈1752〉解職、11年没、年65）—⑯真清（快軒、快惇、快隆、享保19年徳川吉宗に初拝謁、11年相続、明和2年〈1764〉辞し、安永元年〈1772〉没、年51）—⑰丹厚（快諱、明和元年徳川家治に初拝謁、安永元年相続、6年致仕、翌年没、年32）—⑱頼幹（貞伯、快庵、法眼、安永6年相続、天明2年〈1782〉番医、寛政3年〈1791〉寄合列、同年奥医、法眼、8年御匙見習、廩米200俵）—⑲頼修（栄菴、寛政8年徳川家斉に初拝謁、時に20歳）

以上である。この中で利長の治療に当たったのは、10代の吉田淨慶とみられ、少なくとも同人は慶長16年6月～17年閏10月頃までの間であろうことは、〔表3〕でわかる。さらに、詳細にみるために、諸史料にみる盛方院の事例を〔表4〕に示した⁽¹⁹⁾。

[表4] 諸史料にみる盛方院の事例

	史 料 名	年 月 日	盛方院の表記	該当人物
1	「草津そうさ所宛豊臣秀吉書状」	(天正11)・2/12	せいはうみん	吉田淨勝
2	「医学天正記」 乾上 〈曲直瀬玄朔の医書、 治験収録のカルテ集〉	天正17・4 慶長3・10/2 同3	盛芳院淨慶 盛方院淨慶法眼 盛方院	吉田淨慶 同 同
3	「同」 乾下	(文禄3・12/朔)	盛方院	吉田淨慶
4	「兼見卿記(六)」 〈吉田神道宗 家の吉田兼見の日記〉	文禄4・11/14	盛方院	吉田淨慶
5	「兼見卿記 第四」	天正18・正/6、3/16、9/9、9/16、 9/21、9/30、11/28、12/1、 12/3 同19・正/10、5/17、5/21、6/2、 8/7、8/25、9/23、12/23 同20・8/13、9/2	盛方院	吉田淨慶
6	「鹿苑日録」 二十七 〈京都相国寺鹿苑院の歴代院主等 の日記、編年体の編纂物〉	慶長2・4/2 同・4/16 同・12/10	盛方院 盛法印 盛方	吉田淨慶 同 同
7	「豊臣氏三奉行連署状」 〈増田長盛・浅野長政・前田玄以 より島津義弘宛〉	(慶長3)・7/15	盛法印	吉田淨慶
8	「舜旧記」 第二 〈神道家で僧侶の梵舜〔吉田兼見 の弟〕の日記、「梵舜日記」と も〉	慶長7・正/15、4/29、7/3 同8・正/14、3/15 同10・正/18 同11・正/9	盛方院	吉田淨慶
9	「同」 第三	慶長12・正/9、3/28、7/8、8/9、 8/18、8/28、9/9 同13・正/17、正/28、3/5、3/15 同15・正/3、正/6、6/30 同17・正/6、7/28、12/8 (利長治 療、「盛方院自加州依上洛見廻罷」)	盛方院	吉田淨慶
10	「同」 第四	慶長18・正/23、正/28、2/26、4/25、 7/20、11/25 同19・正/9、正/13、5/4 (没)、 5/7 (弔)、9/15、12/28 同20・正/21	盛方院 盛方院	吉田淨慶 吉田淨珍
11	「同」 第五	元和2・12/27 同4・正/4、正/26、7/13、10/30 (盛方院淨慶息)、12/11 同5・4/2、6/25、7/23、8/27、 10/15、12/12 同6・正/21、2/30、3/30、4/23、 5/19、6/9、8/16、9/28、 10/11、11/28、12/2、閏12/9	淨勝(盛方)院 盛方院	吉田淨珍 吉田淨珍

12	「当代記」 第四 〈織豊～江戸初期の編年体書〉	慶長12・閏4・8	盛法印	吉田淨慶
13	「同」 卷九	慶長19・5・4	盛法印	淨慶（死去）
14	「言継卿記」 〈公家山科言継の日記〉	慶長16・10・24	盛法印	吉田淨慶
15	「細川忠利書状」 〈肥後熊本藩初代藩主細川忠利の書状〉	(寛永8)・閏10/9 (慶長16頃か)・12/21 寛永6・3/23 年未詳・7/11 寛永8・8/9	盛方院 盛法印 同 盛方院 同	吉田淨元 吉田淨珍 吉田淨元 同 同 同 同
16	「同」	元和5・3/14	盛法印	吉田淨珍
17	『江戸幕府日記 姫路酒井家本』	寛永11・3/18、3/26	盛方（芳）院	吉田淨元
18	『同』	同16・閏11/朔	盛芳院	吉田淨元
19	『同』	同17・6/18	同	吉田淨元
20	「明暦年録」第一巻	明暦2・4/10、10/晦	盛方院	吉田淨元
21	「寛文年録」第一巻	寛文元・4/19、12/朔	盛芳院	吉田淨元

上記[1]～[21]までの典拠の刊本は以下の通り。[1]草津市立街道文化情報センター蔵、名古屋市博物館『豊臣秀吉文書集 一』吉川弘文館、平成27年、[2]近藤瓶城編、近藤圭造校訂『改定 史籍集覽 二十六』近藤活版所、明治35年、[3]同、[4]岸本真実「兼見卿記」（六）文禄四年自七月至十二月」（『ビブリア』123、平成27年5月）、[5]橋本政宣・金子拓・堀新・遠藤珠紀校訂『兼見卿記 第四』八木書店、平成27年、[6]辻善之助編『鹿苑日録 第二巻』続群書類従完成会、平成3年、[7]『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之四』東京大学史料編纂所、平成23年、[8]鎌田純一校訂『舜旧記 第四』続群書類従完成会、昭和48年、[9]同、昭和51年、[10]同、昭和54年、[11]昭和58年、[12]『史籍雜纂 第二』国書刊行会、昭和49年、[13]同、[14]『大日本古記録 言継卿記 上』岩波書店、平成7年、[15]八代市立博物館未来の森ミュージアム『松井文庫所蔵古文書調査報告書 十五』平成23年、[16]同『 同 十七』平成25年、[17]藤井讓治監修、『江戸幕府日記 姫路酒井家本』3巻、ゆまに書房、平成15年、[18]同 8巻、同、同年、[19]同 9巻、同、同年、[20]『江戸幕府日記 第一編之一』野上出版、昭和60年、[21]『同 第一編之三』、野上出版、昭和61年。([20][21]とも原本は内閣文庫蔵)

[表4] のように、盛方院は治療を中心に往来・贈答品の授受など、「舜旧記」の梵舜、「兼見卿記」の吉田兼見、「言継卿記」の山科言継などの公家衆、豊臣秀吉・徳川家康ら天下人や奉行、細川家等有力大名、曲直瀬道三などの著名な医家の記録類や書状に見えている。なお、[表4] [9] に関連して、前田育徳会尊経閣文庫蔵「天寛日記」に依れば「舜旧記」慶長12年4月8日条に結城秀康死去の記事に「盛芳院」の名も見えている（「当代記」）。ともあれ、今後この盛方院をめぐる詳細な研究が期待される。

表にみえるように盛方院による利長の治療は慶長16から17年であることがわかるが、この間ずっと越中高岡に滞在したとは考えにくい。なぜなら、盛方院は [表4] [9] の「舜旧記」第三に見えるように慶長17年正月6日・同7月28日には京都におり、また、[14] の「言継卿記」にも記されているように慶長16年10月24日には江戸に居ることが明らかである。

さらに、「舜旧記」第三により、慶長17年11月25日に利長の病の治療として、「盛方院自加州依上洛見廻（舞）罷」などと見え、このころ、少なくとも慶長17年11月より少し前まで盛方院吉田淨慶が、越中高岡にて治療に当たり、金沢城に立寄り、何らかのもてなしを請けたのではなかろうか。

以上、利長の治療と盛方院について小括すると、慶長15年～19年までの利長の病は腫物であり、治

療に当たったのは幕医の盛方院吉田淨慶及び腫物の名医である曾谷慶祐のほか、高岡の聖安寺、藩医の内山覚仲・藤田道閑などであることがわかった。

四、光高・清泰院の病と治療

寛永16年（1639）利常の隠居により4代藩主となった光高とその正室清泰院（大姫、水戸徳川頼房娘、家光の養女）の病と治療について、[表5]に示した。

[表5] 江戸辰口邸における光高・清泰院の病と治療

年・月・日 〔西暦〕	人名	年齢 〔歳〕	主な内容（症状・病名、治療医、諸方対応等）	典拠史料
寛永8・5・29 〔1631〕	光高	17	光高は病臥となり、利常父子へ幕府より御書を下賜される	『徳川実記 第二篇』
同15・正・13 〔1638〕	同	24	横山山城守（長知）・本多安房守（政重）は越中砺波郡埴生神主へ宛て、光高が正月2日より疱瘡につき、平癒祈祷執行の旨前田利次（利常の子）が仰出につき申出	「越中古文書」1巻
同15・正・19	同	同	光高の疱瘡平癒を賀し、徳川家光は光高等に安部豊後守忠秋を使いとし銀品を贈る	「天寛日記」54巻 『徳川実記 第三篇』
同15・2・4	清泰院	12	大姫（清泰院）の疱瘡発病につき尾張・紀伊・水戸の三家は江戸城に参上し、老中に謁し見舞う	「同」54巻 『徳川実記 第三篇』
同15・2・13	同	同	大姫の疱瘡平癒につき酒湯を行い、御祝儀を徳川家光より拝領する	「天寛日記」54巻
同15・8・10	光高	24	光高所勞につき、幕府の若年寄朽木植綱を使いとし、家光は鮓を下賜し、朽木も御肴を贈る	「同」55巻 『徳川実記 第三篇』
同18・6・16	同	27	光高所勞につき、幕府は上使阿部豊後守を遣わし、御礼として利常は登営する	「天寛日記」63巻
同21・2・朔 〔1644〕	同	30	光高病癒により、家光は朽木植綱を使いとして見舞いに遣わす	『徳川実記 第三篇』
同21・5・3	同	同	幕医「啓廻院意安」は、今枝民部に宛て、翌朝光高の拝診の義、了承につき返事を書す	「湯浅三輪両家伝書」
正保2・4・5 〔1645〕	同	31	光高「頓死」（『徳川実記』）、朝光高茶の湯に老中を招待、数奇屋にて茶をたてんと勝手にて仕度中に亭主光高「頓死」、「医師中」「療治」するが、終に不蘇生、「近習の小姓の為に弑」せらる（「御日記」）、「阿部対馬守重次、其外医師衆一両人参会ス」（「寛明日記」）、前田利治は本多安房守に宛て、「朝御胸御痛疾指出、一両度吐逆秘成、御見舞、其儘御絶候」と書送る（「古文章大全」）、御振舞御膳済み、「御酒宴半に光高公御目暈心地にて、正気以外取うしなはせ給ひければ、何も肝を消し興さめて」「御氣付薬針治灸治」させるため「御医者玄琢磨法印」を呼寄せ、灸治するが、御面形も変り、絶命される（「三壺聞書」）	『徳川実記 第三篇』 「御日記」 「寛明日記」25巻 「古文章大全」 「三壺聞書」13巻

同2・5・12	清泰院	19	大姫産月により幕府医員「大膳亮三悦」（「道峻據ト補」）を加賀藩邸に附置く	『徳川実記 第三篇』
明暦2・9・23 〔1656〕	同	30	大姫は五七日御不予のところ、俄かに差詰り、養生叶わず、逝去となる	『古案記等三種』

本表では「天寛日記」は前田育徳会尊経閣文庫蔵、『徳川実記 第二篇』『同 第三篇』『同 第四篇』は、黒板勝美、国史大系編集会編、吉川弘文館、昭和51年（〔表6〕とも）、「寛明日記」は内閣文庫所蔵史籍叢刊第67、『寛明日記（二）』吸古書院、昭和61年を活用。なお、「御日記」は原本にて確認できず、『藩史料』に依った。

〔表5〕の光高については、藩主就任以前の金沢及び以後の江戸辰口邸での病・治療などを示したが、この表にみるように、正保2年（1645）光高は没する。すなわち藩主として在職したのはわずか足掛け7年であったが、生前或る時御医師覚与に大臣・小臣などについて意見を論じ述べたといい、学問好きな光高的一面を窺うことができる（「可觀小説」）。覚与は寛永4年侍帳に200石と見える⁽²⁰⁾。

ともあれ、〔表5〕より光高及び清泰院の治療に当った医者について述べていきたい⁽²¹⁾。まず、「湯浅三輪両家伝書」に「判 啓廻院 意安法印」とみえることに関し、「啓廻院」という医者は現時点において、ほかの史料では確認できないが、意安の院号ということであろう。今後他の史料での確認が待たれる。この「意安」は吉田意安とみられ、吉田宗恪（1613～84）とも称する幕医で、元和8年相続する。同人の姉か妹は「大膳亮三悦」の妻である。『江戸幕府日記 姫路酒井家本』の寛永11年3月18日条・同26日条にも、その名が見え⁽²²⁾、また、のちの意安について、天保15年（1844）「天保武鑑」の中に幕府医師衆として「叙位後惣法印之上座、父法印七百石、三はん丁吉田意安法印」などと見える⁽²³⁾。

次に、玄琢（1590～1645）は野間玄琢（成岑、寿昌院）という、曲直瀬玄朔の門下の幕医で、「東福門院（徳川秀忠娘、後水尾天皇の中宮）に附属」となる。

また、幕医「大膳亮三悦」（1612～60）は大膳亮道峻、好菴とも称する。「父祖以来相繼で医を業」とし、のちの承応元年（1652）出仕、「宝樹院御方（家綱母）附属」となる。

以上、〔表5〕よりまとめると、光高は寛永8年病となり、幕府より御書を下賜され、同15年疱瘡に罹る。翌月清泰院も同じく疱瘡を病む。同18年及び同21年光高は再び病となり、幕府より見舞いに使者が来たり、幕医啓廻院意安は光高の拝診を了承、翌年正保2年に光高は頓死する。光高が倒れたとき、医師らは手当てるが、ついに蘇生せず、近習の小姓のため殺されたとの説も浮上する（「御日記」、『藩史料』より）。また、「医師衆一両人」も「参会」したという（「寛明日記」）。胸痛の後、吐逆し、そのまま絶命したともいわれる（「古文章大全」）。さらに、酒宴半ばに眩暈を起し、正氣を失なつたため、気付薬を飲ませ、針灸も行い、医者野間寿昌院玄琢法印を呼寄せ灸治するも絶命したという（「三壺聞書」13巻）。

一方、清泰院は同じく辰口邸において、その翌月、産月となり、幕医大膳亮三悦が加賀藩邸に付置かれ医療に携わる。が、のち明暦2年五七日の鬪病の末、逝去する（「古案記等三種」）。

五、利常と天徳院の病と治療医

3代藩主として慶長10年（1605）利長のあと襲封した利常はそれより以前の慶長6年珠姫（天徳院、徳川秀忠娘）と結婚し、寛永16年6月隠居するが、2人の間に出生した4代光高に先立たれたため、幼い5代綱紀の後見として、江戸（本郷邸）と小松の間を参勤交代して政務を執る。以下從来『藩史料』等刊本でも知られている史料より概要を整理し、次に未刊史料を翻刻し、若干の検証を試みたい。

(1) 従来の翻刻史料等よりみる利常・天徳院の病と治療医家

三代藩主利常と正室天徳院の病と治療について、[表6] に示した。

[表6] 利常・天徳院の病と治療医

年・月・日 〔西暦〕	人名 (居所)	年齢 (歳)	主な内容 (症状・病名、治療医、諸方対応等)	典拠史料
元和8・7・3 〔1622〕	天徳院 (金沢)	24	天徳院は3月に夏姫を出産し、其後肥立ちが不良のため、没する	「三壺聞書」10巻
寛永16・5・6 〔1639〕	利常 (江戸辰 口邸)	47	加賀黄門(前田利常)は昨日より病臥につき、家光は朽木植綱を使いとして見舞う	「天寛日記」57巻 『徳川実記 第三編』
同 閏11・7	同 (江戸本 郷邸)	同	家光は利常の許へ老中松平信綱を遣わし、利常の所勞を見舞う	「同」58巻 『徳川実記 第三編』
同 閏11・8	同(同)	同	利常の所勞の見舞いに、家光は永井監物(白元)を遣わし、松平利治(利常・天徳院の子、大聖寺藩主)は江戸城に登嘗し御礼を成す	「天寛日記」58巻
同17・正・11 〔1640〕	同(同)	48	利常が所勞につき、見舞いとして家光は能勢治左衛門(頼重)を遣わす	「同」59巻
同 同 2・11	同(同)	同	利常の病気に対し家光は、見舞いのため久世大和守(広之)を使いとして菓子を下賜し、御礼として利治は江戸城に登嘗する	「同」59巻
同 同 7・21	同 (加賀小松)	同	利常は国許にて所勞につき幕府は寿昌院玄琢を派遣する	「寛永日記」(「天寛日記」58冊本)49巻
同 同 7・22	同(同)	同	今枝民部(直恒、光高の傳)は中川八郎右衛門(重勝、利常の臣)に宛て、利常御瘧の御氣色の様子につき見舞状を書す	「加賀藩史料」72巻
同 同10・10	同(同)	同	利常は昨年頃より所勞につき、幕府は加賀へ寿昌院(幕医)を付け置いたところ、本復したため御礼として前田権之助(恒知)を以て利常は家光に加賀絹・能登鱈を進上する	「寛永日記」(「天寛日記」58冊本)50巻
同18・6・27 〔1641〕	同 (江戸本 郷邸)	49	利常所勞につき幕府上使安藤伊賀守(重元、御小姓組番頭)が遣わされ、菓子を拝領する	「天寛日記」63巻
寛永21・4・9 〔1644〕	同(同)	52	利常眼病により、家光は御側中根正盛を見舞いに遣わす	『徳川実記 第三編』
万治元・10・12 〔1658〕	同 (加賀小松)	66	利常没(10月17日利常大病により請う儘に在京の医員(幕医)武田道安信重は急ぎ加賀へ赴く)(『徳川実記』)	『徳川実記 第四編』 「三壺聞書」16巻

本表では、「天寛日記」は尊経閣文庫蔵、「寛永日記」は内閣文庫蔵に依る。

[表6] よりみると、三代利常の正室天徳院は元和8年（1622）夏姫出産後の肥立ちが不良で、24歳にて没する。一方、利常は寛永16年（1639）病となり、幕府より見舞いの使者が遣わされる。翌17年幕医寿昌院玄琢も治療として派遣される。この時の利常の病は瘡であり、本復した際、利常は御礼として、家光に加賀絹と能登鱈を献上している。さらに翌18年にも利常は発病し、幕府より再び上使が派遣される。また、寛永21年利常は眼病を患い、幕府より使者が派遣されている。

こうして万治元年10月12日利常は逝去するが、これに関して、「三壺聞書」16巻では、12日は玄猪の御祝（10月の亥の日に、万病を除き、子孫繁栄を祝う）にて夜、「御用所の廊下にて御目舞の御心持ニテ、そこに其まゝ座し給ひ、左門々々と二声御呼被成けるを、当番別所三平・武本三七走り寄て見奉れば、はや御正氣ましまさす、御とし六十二歳ニテ事たゑさせ給へは、兩人驚奉り、品川左門に人をつかわし、岡本平兵衛召つれられ、針を立まいらする、その内に三ノ丸・枇杷島へふれければ、加藤正悦・藤田道仙息継急て走り来り、御脈窺奉る」とみえる。この加藤正悦・藤田道仙について、寛永4年侍帳に、加藤は200石、藤田は220石、兩人とも小松の御馬出（住）と記されている⁽²⁴⁾。

因みに利常が逝去した5日後ではあるが、「在京の医員武田道安信重いそぎ加賀へ赴くべし」と見え（『徳川実記』第四篇）、利常の代においても、幕府の医者の京より下向の事例をみることができる。さらに、この武田道安信重（1584～1665）については、建仁寺永雄につき勤学し「医を業とし洛にあり」、藤原惺窓に入門、元和9年（1623）「天脈（後水尾天皇）を診」し、寛永8年（1631）秀忠の病用として江戸に参り、帰京、翌年再び江戸で家光に薬を調進、のち帰京するなど京都・江戸を往来、紀伊徳川頼宣、尾張徳川義直に薬を調進、明暦2年（1656）東福門院附属となり、「月俸百口」を拝領する⁽²⁵⁾。

ところで、富山県立図書館蔵の五十嵐文書の今枝民部書状及び沢田忠右衛門書状（両通とも5月21日付）に「武田道安」の名が見える⁽²⁶⁾。すなわち、武田道安は、藩主光高の命により、当時江戸や領国内の疫病流行に際し、薬の処方を指南していたことが窺われる。また、のちの天保15年「天保武鑑」に「五百石 下谷[] 武田道安」と記され、近世後期にも幕医の武田家が存続していたことがわかる⁽²⁷⁾。

なお、「微妙公御夜話」に、利常在国での御煩の刻は人見慶安が薬を処方したと見える。この慶安は、寛永2年（1625）『京羽二重』に、京都「小川通下立売上ル 人見慶安」と記載されている⁽²⁸⁾。このことから同人は京都より招請された医者であることがわかる。

（2）未刊史料「小松遺文」にみる利常の病の検証

最後に、未刊史料「小松遺文」1巻（加越能文庫）にみる利常の病について紹介・検証して行きたい⁽²⁹⁾。

[28] 横山長知書状、荒木六兵衛・長谷川大学・稻垣長兵衛・瀬川五郎兵衛宛、7月8日付

（大聖寺藩主前田利治）
尚々、上方医者之儀、其地へ致伺出、 飛驒守様へ得 御意申度存候へ共、御見廻
ニ致参上候事、御停止ニ御座候間、先以書状申上候条、各被仰談被得 御意候而尤存候、
以上、

（前田利常）
今朝以書状申入候へ共、重而令啓達候、 中納言様弥 御機嫌能御座候哉、承度奉存候、就其
上方 医者衆をも被召寄候哉、各々被得 御意候儀、難成候者、 飛驒守様々被仰上候様ニ可
然候哉、近年者御病者ニ被 為成、去年以来至ニ今御病後之事候条、此度ハ急度 被遊御養生
候様ニ仕度儀と存候、能々御談合尤候、恐々謹言、

(寛永17年カ)
七月八日
荒木六兵衛殿
長谷川大学殿
稻垣長兵衛殿
瀬川五郎兵衛殿
人々御中

横山々城守
長判
(長知)

[29] 横山長知書状、荒木六兵衛・稻垣長兵衛・長谷川大学・瀬川五郎兵衛宛、7月10日付

中納言様昨九日之晚ニも御ふるひ、少御ねつきもさゝせられ候へ共、去七日之晚々ハ 御快氣被成御座候由承、千秋万歳目出度奉存候、尚以今日御氣色之御様躰、於仰越候、可忝存候、追々御吉左右奉待候、恐々謹言、

(寛永17年カ)
七月十日
荒木六兵衛様
稻垣長兵衛様
長谷川大学様
瀬川五郎兵衛様
人々御中

横山々城守
長知判

[30] 奥村易英書状、長谷川大学・瀬川五郎兵衛・稻垣長兵衛宛、7月11日付

中納言様御氣色之御様躰、乍恐承度存、重而以使者申入候、其元々被仰越躰ニ而者、御瘧ニ而可有御座かと存候、此地遍照寺護摩之御祈禱ニ而、瘧落申候様ニ取沙汰仕ニ付而、昨晚々頼入、御祈禱之護摩為焼申御事候、御返事ニ 御氣色之御様子被仰越候者、可忝候、恐々謹言、

(寛永17年カ)
七月十一日
長谷川大学様
瀬川五郎兵衛様
稻垣長兵衛様
人々御中

奥村因幡
(易英)
判

上記〔28〕は藩老横山長知によるもので、主な内容をみると、利常の病の見舞い、上方の医者衆の呼寄せの伺、養生のことなどが記されている。〔29〕も長知の書状で、利常が高熱により「御ふるい」のため、寝つきも宜しくなかったが、去る7日晚より御快方傾向のことなどが報じられている。〔30〕は藩老奥村易英の書状で、利常の御瘧につき御見舞い、祈禱の護摩焼きのことなどについて、記されている。また、〔28〕～〔30〕の宛所についてみると、寛永19年「小松土帳」によれば、荒木六兵衛は馬廻組で浜田（小松城下近隣）に居住、1000石、長谷川大学は御小将で、三の丸（小松城内）、500石、稻垣長兵衛は御小将、小寺（同城下近辺）、400石、また、承応2年「小松侍帳」（「古組帳抜萃」1巻）によれば、瀬川五郎兵衛は御小将、300石と見える。これら3点の書状はいずれも寛永17年のものとみられ、藩老より利常の側近に宛てたものである。

おわりに

以上、特に藩祖利家など、記録類やその後の伝聞集に頼らざるを得ない部分もあるが、金沢城主で藩主前田家の初期の人々の病と治療・医家について、次のようにまとめることができる。

利家は慶長3年草津温泉へ湯治に赴き、針立以白が御供し、鍼治を受け、初めは効果があったが、金沢へ帰城したのちも薄墨のような小水が止まらなかったという。また、蛔虫症に悩まされ、徳川家康より複数回の見舞いがあり、利家も病を押して大坂より京都に出向き家康に拝謁している。また、大坂では保養のため乗物にて大坂屋敷内や大坂城内の山里丸の庭内を遊覧した。

利家の子利政は、13歳のとき眼病を患った事例のほか、文禄4年京都で疱瘡に罹ったときは、夕庵という医家が治療したことがわかった。

利家の正室芳春院は、江戸において、慶長5年から19年ころまでの間、喉痛、咳氣、蛔虫症（慶長11年など）、これに伴う腹痛、心痛、嘔吐、下痢のほか、歯茎からの大量出血（壞血病か）、などの事例を窺い見た。これらの病には曲直瀬玄朔（道三、正紹、延寿院）・同玄鑑（道三、今大路親清、親純）が治療に当たった。なお、尊経閣文庫蔵「雜纂文書 編年十一」（尊経閣古文書纂）523番の史料に亨徳院道三の書状も見えており、同人と前田家の関わりも今後詳細にみて行かなければならない⁽³⁰⁾。ともあれ、芳春院は鍼灸を受け、また、湯治に赴いている様子も窺い見た。

二代利長の病については、もっとも史料が多く、従来の翻刻史料等より慶長15年から19年の間、長期間腫物を患った様子を垣間見た。この間家康・秀忠などより見舞状や見舞品が届けられ、医家の盛方院吉田淨慶・曾谷慶祐法印（寿仙）も派遣され、豊臣秀頼も芳春院に宛て利長の病を見舞っている。このように利長は隠居中の足掛け5年にわたる腫物との戦いの中、領国内の仕置や前田家の安泰を願っていた。

次に、未刊の聖安寺文書や「村井文書」「神尾文書」「沢存」の翻刻を行ない、利長の治療のため盛方院の下向について、利常より秀頼へ見舞の御礼を遣わしていることを確認した。また、高岡の聖安寺の住職や藩医の内山覚仲・藤田道閑が治療に当たったことも紹介した。さらに、利長の病・治療に関連し、盛方院の動向をみるため、刊本史料より盛方院が慶長17年11月に治療を終え、京着していることがわかり、この盛方院は吉田淨慶であり、下向は少なくとも慶長16年6月から17年閏10月頃までで、この間複数回江戸や京都、越中、加賀を往来していたことを確認した。

利長の正室玉泉院は元和9年に逝去するが、生前利長とともに高岡在城のとき、気鬱に陥ったことを紹介した。

四代光高は、寛永8年病となり、同15年疱瘡、同18年・21年に再び発病し、幕医啓廻院意安（吉田宗恪）の治療を受けるが、翌正保2年父利常に先立ち、頓死する。この時胸痛の後吐逆し、正氣を失ったため気付薬を処方、幕医の野間寿昌院玄琢法印（成岑）に灸治させるが、絶命する。

光高の正室清泰院は光高の疱瘡の翌月発症する。正保2年には産月となり、幕医大膳亮三悦（道峻、好菴）が治療に当る。のち、明暦2年鬪病の末逝去する。

三代利常は寛永16年に病となり、また、未刊の「小松遺文」より同17年瘡を発症した様子につき翻刻・紹介した。この時、野間玄琢の治療を受ける。また、18年にも病となり、21年眼病を患い、いずれも幕府より見舞として使者が派遣される。こうして、利常は万治元年に没するが、この時岡本平兵衛が鍼治し、また、藩医の加藤正悦・藤田道仙が脈をとった。逝去の5日後、まだその訃報を受けていない在京の幕医武田道安（信重）の加賀への下向を紹介した。

利常の正室天徳院は、元和8年産後の肥立ちが不良で、24歳にて没する。

このように藩主に対する徳川・豊臣の診療医の前田家への派遣・治療の背景には、その後の前田家

の医療の先駆けであるが、ここには、徳川・前田の間でより強い緊張関係を垣間見ることができる。

なお、本稿では利長の病・治療などにつき主な史料を紹介したが、まだほかに、「村井文書」（15日付）の中に、村井出雲宛の芳春院書状に盛方院が記されているという⁽³¹⁾。さらに、「神尾文書」1巻には、2月21日付神尾図書宛の利長書状などが見える。すなわち、「一くわん」（京の町医者）という薬師が下向したこと、腫物の内薬を飲み弱り果てたことなどが記されている。また、石川県立歴史博物館蔵小宮山文書、正月30日付、利長書状にも、同人の腫物のことが見えている⁽³²⁾。

このように利長を含めた初期前田家の病・治療・医家についても、本稿では不充分である点は否めない。今後は、新たな史料の発掘を含め政治史・医療史との絡みの中で、豊臣、徳川や京都の公家衆、僧侶・神官、治療に当った盛方院や曲直瀬亭徳院・吉田意安など、大名家の治療・医家の動向などもみていくことが課題となった。

[註]

- (1) 池田仁子（a）『金沢と加賀藩町場の生活文化』岩田書院、平成24年、（b）『近世金沢の医療と医家』岩田書院、平成27年（『研究紀要 金沢城研究』8～12号まで収載した分を再編成し、新稿を加えた）、（c）「近世金沢の医療—“伝統”的意義を探る—」（地方史研究協議会編『“伝統”的意義を探る—”』雄山閣、平成26年）、（d）「元治元年前田慶寧の退京・謹慎と金谷御殿における治療」（『研究紀要 金沢城研究』13号、平成27年）など。
- (2) 前田育徳会尊経閣文庫『加賀藩史料』清文堂出版、昭和55年復刻。
- (3) 「利家公御代之覚書」など、藩政関係史料全般に関し、石野友康氏より御教示いただいた。
- (4) 『御夜話集』上編、石川県図書館協会、昭和47年復刻にも収録。池田こういち（公一）『前田利家』学習研究社、平成13年、202～204頁参照。また、利家や利政の病、動向については、上記のほか、池田公一『槍の又左 前田利家—加賀百万石の胎動—』新人物往来社、平成11年を参照した。
- (5) 日置謙『加能古文書』金沢文化協会、昭和19年にも収録。
- (6) 養生・保養として庭が利用されていたことについては、池田仁子「兼六園と成巽閣はどんなどこ？」（池田公一『石川県謎解き散歩』新人物往来文庫、平成24年）で少しく述べた。また、池田仁子「加賀藩庭の利用と保養・領民」（長山直治氏追悼論文集、平成28年刊行予定）。なお、『藩史料』編外備考（174頁）によれば、利家の逝去の場所は大坂城中の邸内であったと解釈できるが、慶長年間に前田家の屋敷が玉造町にあったことも含め、今後検討を要する問題であろう。
- (7) 芳春院の病、治療については、吉澤千絵子・御影雅幸・多留淳文「『医学天正記』に見られる芳春院殿（前田利家公正室まつ）診療記録に関する考察」（『薬史学雑誌』38巻1号、平成15年）、瀬戸薫「直筆消息に見る芳春院の実像」（加能地域史研究会編『地域社会の史料と人物』北國新聞社、平成21年、同「江戸の芳春院まつ」（『石川自治と教育』石川県自治と教育研究会、平成27年）、芳春院の動向については池田公一『名君 前田利長』新人物往来社、平成22年を参照。また、前田家の江戸藩邸については、『藩史料』編外備考、及び石野友康「『加賀藩江戸上屋敷御殿平面図』について」（横山隆昭氏所蔵絵図解説しおり、加賀藩・歴史文化護持協力会、平成23年）などを参照した。
- (8) 『前田土佐守家資料館所蔵・射水市新湊博物館所蔵 芳春院まつの書状図録』前田土佐守家資料館、平成24年、24頁による。
- (9) 曲直瀬玄朔・玄鑑については、高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編『新訂 寛政重修諸家譜』巻10、続群書類從完成会、昭和55年、及び『国史大辞典』13巻（平成4年）「曲直瀬玄朔」の項、1巻（昭和54年）「今大路道三」の項、吉川弘文館を参照。
- (10) 本稿〔表3〕13・21番等とも関連するが、最近年利長の遺誠・隠居等について論じたものに、見瀬和雄「前田利長の遺誠と慶長期の加賀藩政」（加賀藩ネットワーク編『加賀藩武家社会と学問・情報』岩田書院、平成27年）、萩原大輔「前田利長隠居政治の構造と展開」（『富山史壇』178号、平成27年）等がある。なお、利長の病や動向

については、池田公一、前掲（7）を参照。

- (11) 京都国立博物館図録『琳派 京を彩る』平成27年、244頁。
- (12) 前掲（9）『新訂 寛政重修諸家譜』巻13。
- (13) 「北徵遺文」については、油井晶代「石川県立図書館蔵「北徵遺文」所収史料目録」（『加能史料研究』14号、平成14年）がある。また、石川県史調査委員会・同県立図書館史料編さん室より『石川県史資料近世篇（6）北徵遺文 二』が写真版にて平成19年に出された。
- (14) 内山覚伸・藤田道閑については、池田仁子、前掲（1）（b）第二編第一章。
- (15) 『藩史料』編外備考。
- (16) 前掲（9）『新訂 寛政重修諸家譜』巻4。
- (17) 主馬について、「富山侍帳」「慶長之侍帳」は石川県立図書館協会『加賀藩初期の侍帳』昭和17年に依った。また、四井主馬については、日置謙『改訂増補 加能郷土辞彙』北國新聞社、昭和48年、「四井主馬」の項に依れば、同人は慶長5年利長の指示により大聖寺陥落の時に功績があったという。もし、忍びの者である四井に盛方院の宿に関し、何らか関わらせたとすれば、種々に情報収集させ、盛方院の動勢を監視する役目もあったのだろうか。次に、右の日置著では、4000石大音主馬を厚用とし、このほか、久兵衛の子で、大井主馬（100石、大坂再役に首2つを取る）を別項立てし取上げている。また、本文に示した「慶長年中御家中分限帳」の奥野主馬に関して、日置著では「奥野氏清」（紀伊、慶長16年利長の遺書の宛所連名に記）、「奥野氏次」（主馬、氏清の子、室は利政の娘）の項でも、検討を要する内容が見える。
- (18) 前掲（9）『新訂 寛政重修諸家譜』巻5。
- (19) 盛方院に関する諸史料をはじめ、[表3]における豊臣秀頼自筆書状、本阿弥光悦書状など利長の病・治療に関する史料などについては、大西泰正氏より御提供・御教示いただいた。
- (20) 加賀藩の医者である覚与については、池田仁子、前掲（1）（b）第二編第一章。
- (21) 以下、吉田意安については、前掲（9）『新訂 寛政重修諸家譜』巻7、野間玄琢については同巻13、大膳亮道峻については同巻20（昭和56年）に依る。
- (22) 藤井讓治監修『江戸幕府日記 姫路酒井家本』ゆまに書房、平成15年。
- (23) 深井雅海『図解・江戸城をよむ』原書房、平成7年。
- (24) 池田仁子、前掲（1）（b）第二編第一章。
- (25) 前掲（9）『新訂 寛政重修諸家譜』巻3。
- (26) 武田道安の名の見える五十嵐文書の存在については、木越隆三氏より御教示いただいた。詳細については、近刊、木越隆三「前田光高の学識を探る—飢民療治を指示した書状から—」（長山直治氏追悼論文集、平成28年刊行予定）参照。
- (27) 深井雅海、前掲（23）138頁。
- (28) 京都府医師会『京都の医学史』思文閣出版、昭和55年、1047頁。
- (29) 「小松遺文」については、木越隆三氏より御教示いただいた。
- (30) 前田家に出仕した曲直瀬亨徳院については、池田仁子、前掲（1）（b）第一編第一章では近世中後期以降に触れていないことなどから、これらを補充し、明治3年及び同5年「先祖由緒并一類附帳」（加越能文庫）から以下略系譜を示しておきたい。なお、右史料では、②～⑬代まで「亨徳院」の名が冠称されているが、以下、これを割愛した。
 - ①道三正盛（利家へ「出入」「合力米」拝領、文禄3年没）＝（=は養子を示す。以下同）②道三正純（利家へ出入、合力米拝領、家康の御番医師、慶長16年没）—③道三正因（利長へ出入、合力米拝領、秀頼・家康も拝診、元和元年没）＝④道三正専（利常に出入、合力米拝領、寛永元年没）＝⑤玄與（光高の代出仕、合力米500俵、折々金沢へ下向、寛永20年江戸にて没）—⑥玄承（寛永20年相続、合力米300俵のち500俵、折々金沢下向、綱紀の代、江戸・京・金沢往来、延宝5年没）—⑦正淵（延宝5年相続、300俵、江戸・京・金沢往来、享保4年没）—⑧正格（享保5年相続、500俵〈明治5年の右史料では300俵〉、元文3年金沢にて没）—⑨玄廸（元文4年相続、100俵、のち300俵、安永7年京にて没）＝⑩玄信（安永7年相続、200俵、金沢・京を往来、文化6年金沢にて没）—

⑪玄承（文化7年相続、200俵のち10人扶持、金沢・京・江戸往来、天保13年金沢にて没）=⑫正元常昭（天保13年相続、200俵、安政3年京にて没）=⑬道策是盛（安政3年相続、200俵、慶応3年京にて没）—⑭曲直瀬安治郎盛明（慶応3年相続、大坂着米、15人扶持、寺は京都の十念寺）、以上である。

(31) 高澤裕一「「前田利長の進退」補説」（金沢学院大学芸術文化学部文化財学科『文化財論考』創刊号、平成13年）11頁。

(32) 石川県立歴史博物館『利家とまつをめぐる人々—大河ドラマ放映推進事業—』平成13年、76頁。

[付記]

本稿執筆に当たり、金沢城調査研究所の木越隆三・石野友康・大西泰正の諸氏に大変お世話になった。衷心より感謝申し上げたい。